朝日新聞夕刊 2018 年 6 月 22 日

朝倉の流木 龍に

6/22 朝(9)(19)

「水の守り神。子どもたち守って」

九州北部豪雨 彫刻家寄贈へ

九州北部豪雨で流木となったクスの木が、木彫りの龍に生まれ変わった。豪雨から1年となる7月5日に、大きな被害を受けた福岡県朝倉市内にある市立杷木小学校に寄贈される。「龍は水の守り神。子どもたちを守ってほしい」という願いを込めて。

右流木集積所にあったクスの大木＝2017年7月26日、福岡県朝倉市三奈木、知足美加子さん提供
左流木クスから彫った「朝倉龍」と知足美加子准教授＝18日、福岡市南区塩原4丁目の九大芸術工学研究院

どっしりした体からクスの香りが漂う。ノミで丁寧に彫られたウロコ、鋭いようで優しいまなざし。右手につかむ如意宝珠は、水を自在に操る力を表す。「朝倉龍」と名付けられた。

手がけたのは彫刻家で九大芸術工学研究院准教授の知足美加子さん(52)。「梅雨や台風で不安になったとき、龍があるから大丈夫と、子どもたちに安心してもらえたら」と願う。

九州北部豪雨は土砂とともに流木が被害を拡大させる要因になった。発生から2週間後、九大の支援団の一員として被災地に入った知足さんは、木が悪者のように言われるのが気にかかっていた。

そんなとき、同市三奈木の流木集積所でクスの大木を見かけた。直径1㍍超、樹齢130年余。「自分も生きていた」。そんな声が聞こえた気がした。「出会った瞬間、『彫らなきゃ』と思いました」。龍の姿が浮かんだという。

地元で製材所を営む杉岡世邦さん(49)に協力してもらい、許可を得て木を搬出。うろの中まで入り込んだ泥を杉岡さんが洗い落として製材し、福岡市内の大学に届けてくれた。

知足さんが下絵を描いてチェーンソーで切ると、火花が散った。災害の衝撃で裂けた割れ目に小石が入りこんでいた。「災害が形として木の中にとどまっていた。ひとノミ、ひとノミ、木が生きてきた時間を感じながら、祈りを込めて彫りました」。知足さんは英彦山の山伏の子孫。英彦山のシカの角で2本のひげを作り、半年かけて完成させた。

杷木小は今春、140年余の歴史をもつ4小学校が統合してできた。木の樹齢とほぼ同じだ。「未来に向かう力にしてほしい」との思いがあり、学校に贈ることにした。塚本成光校長(52)は「災害の教訓と、それぞれの学校が歩んできた時間を刻んだものとして、大事にしていきたい」と話した。

（渡辺純子）